スロウス・リング

神楽妖介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スロウス・リング

【Ｎコード】
Ｎ２１３８Ｉ

【作者名】
神楽妖介

【あらすじ】
色々困った変わり者の叔父と一緒に暮らしている男子高校生、佐藤良一はある日、叔父が衝動買いした不思議な指輪に閉じ込められていた“怠惰の悪魔　ベルフェゴール”を復活させてしまう。
その影響で周囲に怪現象が発生し出してしまい、良一は責任を取る為に怪現象の解決に乗り出す。
苦労人でお人よしの良一と面倒くさがりな悪魔ベルフェゴールの妖怪退治物語。

プロローグ（前書き）

妖怪や悪魔が出るベタな物語が作りたくて書きました。
取り敢えず、序章をどうぞ。

プロローグ

悪魔。
それは神と対立する邪悪の権化。
主にキリスト教との宗教戦争に負けて堕落し、歪んでしまった神の事。
その歴史はとても古く、黒ミサ、サバト、悪魔崇拝等の様々な形で人々の心に影響を与え続けてきた。
中世ヨーロッパの時代には、己の欲を満たさんが為に悪魔と契約を結び、魔女や魔術師になった者も居たと伝えられている。
十六世紀に実在した謎の人物、ヨハン・ファウスト博士が悪魔メフィストフェレスと契約をして己の欲望を叶えさせていたという伝説は有名である。
悪魔と契約をすれば強大な力が手に入り、望みを叶える事が出来る。
契約の代償は大きく、最後には凄惨な死を迎える事になるのだとしても、人々は神の愛の鞭よりも、欲望に塗れた悪魔の甘い蜜を求めた。
純白よりも灰色を。
灰色よりも漆黒を。
悪魔はこうして神に負けない絶対的な存在を獲得した。
そして、後に人は考える。
悪魔を契約無しで仕えさせる方法は無いのかと。
悪魔を支配する方法は無いのかと。
その底知れぬ欲深さ故に。

プロローグ（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございます。
まだ序章なので、登場人物は誰も出てません。
次にはしっかり出すつもりですので、よろしくお願いします。

悪魔ベルフェゴール　その１（前書き）

大変長くお待たせして本当に申し訳ございませんでした。
取り敢えず、主要人物を登場させる事は出来ました。
拙い話ですが、楽しんで貰えれば本当に幸せです。

悪魔ベルフェゴール　その1

初めまして、佐藤良一と申します。
日本の高校一年の男子です。
両親が幼い頃に亡くなってから、現在までずっと母方の叔父の所で暮らしているのですが、その叔父の事で俺はしょっちゅう頭を痛めています。
実は今回もまた叔父のせいで頭を痛めています。
「カァッコイーだろぅ！これは絶対に地味な良くんには必要だと思って買って来たんだ！さあ！俺に感謝するが良い！」
叔父は相変わらずの独特でハイテンションな喋り方をしている。
「はいはい。これが必要かどうか置いといて、問題はこれを一体幾らで買ったのかだ……幾らだった？」
極めて冷静に俺は叔父に尋ねた。
「ん？値段？えーとぉ、八十万位だったかなぁ？ＡＴＭで、ガーッとやったんだぁ」
成程。つまり近所にあるＡＴＭから一度に引き出せる最高金額を一気に卸して、今、俺の右手の平に置いてある銀の指輪を購入したという事か……。
あまりに突拍子の無さ過ぎる行動に俺は何も言えなかった。
「嵌めてみなよ！絶対似合うって！これとかこれも！これで良くんパワーアップだ！」
叔父は子供の様にきゃっきゃと騒ぎながら自分の周りに置いてある色々な物を俺に寄越してくる。
「……つまり、全部これ等を買うのに数百万円を遣ってしまったと……」
指輪、チェーン、ネックレス、サングラス、アイパッチ、ブーツ、グローブ、カツラ、付け髭、包帯、他にも色々。
頭が痛くなってきた。

叔父の暴走は今に始まった事では無いが、やっぱりやる事が全て突拍子が無さ過ぎる為に一々頭痛が起きる。
問題の叔父の名前は、佐藤完人。
歳はちょうど三十歳、職業は自称芸術家という変わり者。
見た目はかなりの美形で、一見するとヨーロッパ系ハーフの青年の様に見える。
完人叔父は純日本人のはずなのに何故か生まれつき肌が白いうえにやけに鼻が高く、更に髪を金色に染めている為、ハッキリ言って日本人には見えない。
ごく普通の醤油顔の日本人である俺と血が繋がっているとは、今になっても思えない。
「これは絶対似合うよぉ！あ！そうだ！折角だからこの際、髪を真っ赤にしてみたら良いんじゃないかな？ね、良くん」
外見どころか思考回路も俺とはまったく違う。
いや、こんな思考の持ち主の完人叔父を反面教師にしていたからこそ、俺はまったく違う思考を持ったとも言える。
「いや、いいよ。それに髪染めるのは校則違反だし」
「大丈ー夫♪絶対似合うから先生達も見逃してくれるって♪」
毎日がこんな感じなので、俺はとても疲れます。
「……普通なら言う必要は無いんだろうけどさ……叔父さん、世間ってものはそう甘くないんだって……」
「良くん！」
完人叔父がいきなり、厳しい声で俺の名前を呼んだ。
流石に高校生の俺にそこまで言われるのが心外だったか？
「叔父さんじゃなくって、パパだろ！？忘れたの？」
「……はい、そうでした……」
俺はかなり呆れながら返事をした。
完人叔父は俺を本当の息子だと思っているので、自分の事は叔父では無く、パパと呼ぶ様に言っていたんだった。
うっかりしてたよ。

この人には常識がまったく通用しない事を忘れていた。
それと――。
そんなチャランポランな人でも俺の事を本気で自分の息子だと思ってくれている事を。
なんか、どうでも良くなってきた。
「……じゃあ、父サン」
パパと呼ぶのは気恥ずかしいので、“父サン”と呼ぶ。
少しだけ片言なのは、やはり完人叔父があくまで叔父なのだという事実と、自分よりも手の掛かる人を父親とはあまり呼びたくない気持ちからだ。
「取り敢えず、あまり金を湯水の様に使わないように！俺に相談しないで俺の買い物をするのは出来るだけ控えてくれよ」
完人叔父は宝くじを連続で当てるという驚異的というか奇跡的なくじ運と、俺にはさっぱり分からない叔父の作品を買ってくれる固定客（俺は話に聞くだけで直接会った事は無い）のおかげで莫大な金を持っているが、やはり無駄遣いはいけないと思うので注意をしておく。
「……はぁ～い」
完人叔父が力のない適当な感じで返事をした。
やっぱり俺の方が完人叔父を世話している様な感じがするな……。
「ま！と、に、か、く！この指輪は似合うと思うんだよね！」
完人叔父はニッコリと笑いながらそう言って、俺の右の人差し指に買ってきた指輪を嵌めた。
この人は俺の話を全く聞いていないのだろうか？
「だからさ、アクセサリーとかは校則で……」
そこまで言って、俺は口を閉じた。
俺は自分の指に嵌められた指輪を見て、言葉を失ったのだ。
立派な指輪だった。
僅かな光を当てただけでも輝く白銀の指輪。
精巧な細工で作られた本物そっくりの口を開いて牙を向けている

熊の頭が付いている。
熊の口には真っ黒い宝石の様なものが咥えられている。
指輪とかの価値は分からない俺だが、この指輪は高価な物だと直感で思った。
「叔父、いや、父サン。この指輪、何処で買ったの？つーか、幾らしたの？」
「えーと……どうだったかなぁ？色々買っちゃったから、いちいち憶えてないんだよねー……どうだっけ？」
「いや、だから、俺が聞きたいんだって……『出して！』
いきなり声が頭の中に響いてきた。
俺の声でも完人叔父の声でもない、聞いた事の無い声。
驚いた俺は咄嗟に辺りを見回した。
「良くん？どーかしたの？」
「え？あれ？叔父……じゃなくて、父サン、さっきの声、何？」
『出して！』
また声がした。
「声？何の事？」
完人叔父はきょとんとした表情をして、首を傾げた。
幻聴か？
『出して！』
また聞こえてきた。
「これ……どういう事だ？」
俺はすっかり訳が分からなくなり、混乱しかけていた。
「良くん、何か聞こえるの？俺には聞こえないの？」
完人叔父は不思議そうにそう言って、両耳に手を当てて辺りの音を拾おうとしていた。
『出してよ……』
まだ、あの声がする。
今にも泣き出しそうな弱々しい声がずっと俺の頭の中で響き続ける。

言っている事も全く同じ。
俺は本当に訳が分からなくなった。
『出して……』
「……そんなに出たいなら、好きにしろよ……勝手に出て来いよ……」
混乱して頭が疲れてきていた俺は、小さな声でそう呟いた。
その次の瞬間、予想外の出来事が起きた。
俺が嵌めている指輪から、いきなり大量の黒い煙が噴出し出したのだ。
「うわぁっ！」
驚いて俺は咄嗟に指輪を嵌めている指を顔から一気に離した。
「うわー！何これ？もしかして、手品？」
危機感は感じられないが、完人叔父も驚いている。
指輪は激しい勢いで煙を出し続ける。
頭では換気をしろ、とか指輪を外に捨てろ、等色々やるべき事は考え付いているが、あまりの奇妙な出来事に俺は何も出来ず、ただ混乱するだけだった。
あっという間に真っ黒い煙が部屋中に蔓延した。
煙に包まれた俺は視界を完全に遮られてしまった。
その間に驚いた俺は過って、その煙を少し吸ってしまったが、煙自体は無臭で息も苦しくならなかった。
多分、害は無いようだ。
それよりも、一体何が起きてるんだ？
しばらくすると、煙が徐々に薄くなっていった。
煙が全て無くなると、何かさっきまで存在しなかった物が横たわっているのが見えた。
それは、銀色の物体――とても長い銀色の毛の束だった。
頭に立派な黒いシルクハットを被った、流れる様に艶やかな銀色の毛がまるで筆の先みたいな状態になっている変な物。
足元にはこれまた立派な古めかしい黒いコートを敷いている。

「……」
俺は何も言う事が出来なかった。
「良くん、これ何？」
完人叔父が呑気に俺に聞いてきた。
はっきり言って、そんなの俺が聞きたい。
まず、どうすれば良いんだ？
こんな異常事態の時は、先ず落ち着いて冷静になってから……。
「分かんないの？じゃ一、調べてみよっか！」
何て考えているそばから、完人叔父がニッコリと笑いながら楽しそうに言って、物体に近付こうとした。
この人は、こんな意味不明な事態すらも楽しいらしい。
「ちょ、ちょっと待って！迂闊に近付かない方が良いって！」
俺は慌てて完人叔父の軽挙妄動を止めた。
その時、物体が何の前触れも無しに突然起き上がった。
俺は予想外の事に驚き、完人叔父を抑えている状態で硬直した。
物体がのそりと動き、中から白くて細い腕が二本出てきた。
手の平を自分の目の前に出すと、まるで自分の手の平を見詰めているかの様な状態のまま動きを止めた。
「……出られた」
銀色の物体は、か細い涙声でそう呟いた。

悪魔ベルフェゴール　その１（後書き）

次話か、その更に次話辺りには妖怪との戦い等を書ける様に頑張ります。

悪魔ベルフェゴール　その２（前書き）

また遅くなってしまって、どうもすみませんでした。
それにしてもなかなか妖怪が出現しませんね……。
次回こそは妖怪出現と悪魔の活躍を書けると思いますので、これからもどうかよろしくお願いします。

悪魔ベルフェゴール　その2

この日の夜、微かに町が震えた。
地震とは違い、町の住人達は誰も震えを感じなかった。
その代わりに感じたのは、一瞬の寒気だった。
恐ろしい何かが、決して現れてはならない何かが姿を現した。
住人達は頭では理解出来ない恐怖を、一瞬だけ本能で感じた。

※

「……べる～……」
目の前の怪人物がたっぷりと間を持たせて言った言葉は、それだけだった。
名前を聞いただけなのに、随分と面倒臭そうだ。
「……ベルーさんって言うんですか？」
「……」
今度は無反応だった。
怪しい煙が部屋中に充満した直後、何処からともなく姿を現した謎の人物、自称ベルー。
理解不能な異常事態に混乱の極みだったが、俺は冷静になる事に徹し、落ち着いて事態の収拾に努めていた。
先ず俺が最初にやった事は、相手にコートを着せる事から始めた。
この怪人物、ベルーは頭に被っているシルクハットと足元に敷いている古びたコート以外には何も持っていなかった。
つまり、素っ裸だった。
明らかに自分の身長を超えている長さの銀髪を前後左右万遍無く伸ばしているので、素肌は殆ど見えなかったが、それでもこいつは裸だって事はすぐ分かった。

ありえない位に伸びすぎている銀髪のお陰で全て丸見えって事にはなっていないが、全裸のままにする訳にもいかないので、取り敢えず敷き物にされているコートを引っ張り、相手に着せたのだった。
実の所を言うと、その間俺は色々と我慢していた。
明らかにおかしい状況に突っ込みを入れまくりたかったという事に対しての我慢もあったが、それよりも怪人物の容姿の方が問題だった。
長過ぎる銀髪の隙間から見えたベルーの顔は、凄い美人だったからだ。
もしかするとベルーは女かもしれない、という事は……。
そこで俺は考える事を止めて、ベルーにコートを着せる事に成功した。
そして、次に俺はベルーが何者でどうやって此処に現れたのかを質問した訳なのだが、ベルーはやる気というものを全く見せず、質問は基本的にスルーで自分からは何も言わない。
しかも、下手すると眠ってしまいそうな仕草までする始末だった。
もう五分以上やっているのに、本当かどうかも分からない名前位しか判明していない。
俺は頑固な犯人の取調べをやっている刑事の気分だった。
「ねー、ねー！ベルちゃんは魔法使いなの？」
いきなりそう言ったのは完人叔父だった。
いくら摩訶不思議な登場だったからって、それは無いだろ。
本当に成人男性なのかこの人は？
一緒に暮らしている俺でも、流石に心の中でそう突っ込んだ。
その時だった。
「……ちがう、あくま……」
面倒臭そうな口調でベルーは呟く様にそう言った。
「は？悪魔？」
最初は言っている事の意味が分からなかった。
「悪魔って、あの角とか黒い翼とかが生えてる奴？」

完人叔父は興味津々といった感じでそう言って、ベルーの許に近付いていった。
「じゃあ、ベルちゃんの頭にも角生えてるの？」
叔父さん、頼むからもっと常識人になってくれと俺は思った。
やる気の無い態度に出鱈目な内容の言葉まで言う不法侵入者、ついでにこういう状況でもマイペースな困った叔父……もう限界だ。
俺は本気で警察を呼ぼうかと思って腰を上げようとした。
「ちょっと見せてみてよー！」
完人叔父がそう言って、ベルーの頭のシルクハットを手に取って持ち上げた。
「あ……だめ……」
そう言ったベルーの頭を俺は見た。
ベルーの頭には、先が三角形に尖っている矢の様な形をした触角が二本生えていた。
「……触角？」
俺は思わず頭の中に浮かんだそのままの単語を口にした。
「これって触角？本物なの？」
完人叔父はシルクハットをその場で手放すと、ベルーの頭の触角を掴んで軽く引っ張った。
「ひゃあっ！」
いきなりベルーが今まで一番しっかりとした大きな声で叫んだ。
「えっ？」
「わ」
驚いた完人叔父はベルーの触角から手を離した。
ベルーは糸の切れた操り人形の様にヘナヘナとその場に倒れ込んだ。
「……つの……だめ……」
そう言った直後、長髪から少しだけベルーの顔が現れた。
ベルーの目には微かな涙が浮かんでいた。
「ごめんね。大丈夫、ベルちゃん？」

完人叔父は申し訳なさそうな声ですぐに謝った。
俺はそれを見て動きを止め、不覚にも可愛いと思ってしまった。
その直後だった。
いきなり身体中に強い悪寒が走った。
「うっ……」
俺は咄嗟に腕を身体に回した。
「何？……気持ち、悪い……」
完人叔父もいきなり気分が悪そうになった。
様子が変わっていないにはベルーだけだった。
不吉だ。
何か良くない事が起こる。
俺は本能的にそれを感じた。
その時、玄関へと繋がる扉が突然開き、不吉の根源が姿を現した。

悪魔ベルフェゴール　その3

不吉の根源は扉を開き、ゆっくりと姿を現わした。
その姿を見て、俺は硬直した。
どろどろとしたスライム状の茶色い身体に、無数の血走った眼球が付いているグロテスクな姿。
眼球はそれぞれ別の方向を見詰めながら蠢き、身体は溝の臭いに似た悪臭を放っている。
ありえない光景、完全な非現実だった。
俺だけじゃなく、あの完人叔父ですらこの状況を受け入れる事が出来ずに硬直していた。
怪物はナメクジの様に身体を引きずりながら部屋へに入って来た。
これは、危険だ！
俺の頭の中で危険だという本能が警報を鳴らし続けていた。
「……ウウゥ……眠ィ……」
ぶくぶくと泡を出しながら、怪物は悪臭と共に言葉を発した。
背筋が凍る程に恐ろしい声だった。
その間、俺は何も出来なかった。
何をすればいいのか？
それすらも思い付かなくなるくらいに、この空間は異常だった。
危機を知らせる本能も、余りにも衝撃過ぎる非日常の前では何の動力源にもならなかった。
「い、嫌だ……気持ち悪い……」
弱々しい声を上げたのは完人叔父だった。
顔を真っ青にしていて、今にも倒れそうな様子だ。
「アアァァァ……ソォォォダァァァアアア……」
怪物が再び不快な声を上げた。
悪臭とグロい外見が相まって、吐きそうだ。
「人ヲォォォォ……食ゥゥゥエバァァァ……イインダァァァ……」

怪物の言っている事の意味を、すぐには理解出来なかった。
人を、食う？
「……ヤバい……」
その時、やっと俺が喋れた言葉は、それだけだった。
そして――。
「イィィタァァダァァァキィィィ、マァァァスゥゥゥゥゥ！」
いつの間にかすぐ側に近付いていた怪物の身体が、上下左右に大きく広がった。
俺達を、飲み込む気だ。
完人叔父は未だに気持ち悪そうにしていて、俺も恐怖や不快感のせいで足が全く動かない。
もう逃げられない。
俺達の命は、理解不能な非日常の前に、呆気なく終わろうとしていた。
その時だった。
『×××××××××××××』
今まで生きてきて、一度も聞いた事のない言葉が、俺の隣で聞こえた。
いや、本当に言葉だったのかも分からない。
何を言っていたのか、全く理解出来なかった。
その言葉を口にしたのは、すっかり存在を忘れていた、ベルーだった。
ベルーは怪物に向けて謎の言葉を発した後、片手で床を叩いた。
次の瞬間、怪物の足元に大きな穴が何の前触れも無く現れた。
「ハ、ハァァァァァァ！？」
それが最後の言葉だった。
怪物は断末魔の叫びを上げながら、突然現れた大きな穴に落ちていった。
しばらくすると、穴は自然に消えてしまった。
ベルー以外の非日常は、最初から存在していなかったかのように

消えてしまった。
「……あ、あのさぁ？」
完全に静まり返っていた中で、俺はやっと口を開いた。
「さっきの……何？」
混乱し続ける頭の中をなんとか鎮めて、口から出せた言葉はそれだけだった。
俺の問いに対して、ベルーは呑気に欠伸をしながら言った。
「……穴……」
いや、それは分かるよ。
俺は頭の中ですぐ突っ込んだ。
「……ちゃんと、答えてくれよ？　なんかもう……意味が分からな過ぎて……」
弱々しい口調で俺は再び説明を懇願した。
とにかく説明が欲しかった。
しかし、そんな俺に答えるのも面倒臭いらしく、ベルーはその場に横になった。
「……つかれた……ねるぅ……」
そう言って瞼を閉じ、本気で寝息を立て始めた。
「は？」
流石にここまで人の事を無視するとは思っていなかった。
そして直後、あまりの理不尽さに俺は、ムカついた。
怒りたくなったけれども、怒鳴ったり暴れたりするのが余り好きじゃない俺は、不満たっぷりな口調でこれだけ言って、怒りを主張した。
「……もういい……お前、もう帰れよ……」
その時だった。
「ひぃっ！　いやぁぁぁぁぁっ！」
ベルーが大きな悲鳴を上げた。
グロテスクな怪物がいきなり現れても無反応同然だったベルーが、本気で拒絶の悲鳴を上げた。

しかし、俺はその事には全く驚かなかった。
何故なら、そんな事よりもずっと大きな異変が起こったからだ。
突然、ベルーの身体がついさっきまで部屋中に充満していた黒い煙に覆われ出した。
黒い煙はベルーの身体から噴き出していて、煙が多くなるに従ってベルーの身体が徐々に薄れていた。
そして、煙は俺の人指し指に嵌められている銀の指輪へと吸い込まれていき……。
あっという間の出来事だった。
気が付けば黒い煙どころか、ベルーの姿も完全に消えていた。
『やだぁ！　出してぇ！』
俺の頭の中に、あの声がまた響いてきた。
新しい非日常を体験し、俺はこの声の主がベルーだった事を悟り……。
ベルーが本当に人間では無く、自分で名乗った通り悪魔なのだという事も悟ってしまった。
嗚呼、今日って一体何なんだろう？
頭を痛める俺の悩みに、答える声は無かった。

悪魔ベルフェゴール　その３（後書き）

やっと妖怪対決らしきものを書けました……力不足でどうもすみません。

ここまで読んで下さって、本当にありがとうございます。

次話はもっと盛り上がる展開を書いてみせますので、これからもよろしくお願いします。

悪魔ベルフェゴール　その４（前書き）

大変長くお待たせしました。
余り大きな進展はありませんが、楽しんで読んで戴ければ幸いです。

悪魔ベルフェゴール　その４

「……どうしよう」
先程、信じれない現象が起こったばかりの部屋の中で、俺はぽつりと呟いた。
完人叔父は気分がまだ悪いらしく、未だに横になったまま。
そして、俺の頭の中では、あの謎の声が再び響いている。
いや、この不思議な声の主の正体が発覚した今、この声は謎の声ではない。
むしろこれは――。
『出してっ！　お願い、出してぇ！』
有り得ない不思議な声へと、ある意味でランクアップしていた。
「……ベルー、出て来い」
少しして、俺は小さな声で指輪に命令した。
すると、最初と同じ様に指輪から黒い煙がもくもくと噴き出し始めた。
黒い煙が部屋中に蔓延して、それから徐々に薄くなり、そして――。
「……うう～……」
悲しげな呻き声がした。
最初と同じように、ベルーは現れた。
「……封印……嫌ぁ……」
ベルーの身体は小刻みに震え、銀色の瞳には涙が溢れていた。
「あ……あの……ごめん……」
とてつもない罪悪感が押し寄せ、俺の口から自然と謝罪の言葉が漏れた。
「……何でも……話す……だから、封印、嫌ぁ……」
悲しみの篭った弱々しい声で、ベルーは言った。
どうやら封印されるのは、本気で嫌らしい。

でも、どうして封印出来たんだ？　俺の頭の中が、また非現実的な疑問で溢れ返りそうになった時、ドサッという音がすぐ隣で響いた。
怪物が現れてから、何故かすっかり弱り切っていた完人叔父が床に倒れた音だった。
「あっ！　叔父さん！」
予想外の出来事の連続で忘れかけていた！
「叔父さん！　大丈夫！？」
慌てて完人叔父に声を掛け、無事かどうかを確かめる。
「うぅ……気持ち、悪いぃ……」
消えそうな位に小さな声で、完人叔父は呟いた。
「叔父さん、ちょっと待ってて」
そう言って俺は完人叔父の腕を肩に掛け、引きずるように寝室へと運んだ。

※

「さて、と」
一区切り着いた事を確認するように、俺はそう言った。
「先ず、さっきの変な生き物は何だ？」
完人叔父をベッドで寝かせ、深呼吸やら水を飲んだりやらして、やっと落ち着いてきた俺は、改めてベルーに尋ねた。
裸のままではいけないと思って、取り敢えず足元に敷いていたコートをしっかりと羽織らせたベルーは、今にも閉じそうな目を眠そうに擦りながら、その小さな口を開いた。
「……知らない……名前も無い……日本の妖怪……」
「妖怪、なぁ……ベルーはあれの仲間なのか？」
「……違ぅ……ベルー……悪魔……あれ、此処の……妖怪……」
「……悪魔と妖怪って違うのか？」
「……違ぅ……眠ぃ……怠いぃ……」

そう言うと、ベルーはまた寝ようとし始めた。
「ええっ！　ちょ、ちょっと待て！　まだ寝るなって！」
話しが中途半端過ぎて、全く訳が分からない！
これじゃ、むしろ混乱が増しただけだ。
「……寝るぅ……ぐー……」
瞼を完全に下ろしたベルーから、小さな寝息が聞こえ始めた。
間違い無く、すっかり眠りに落ちている。
その様子に、俺は本日何度目になるか分からない溜め息を吐いた。
「……これを使って脅せば、怖がって言う事を聞くんだろうけど……」
そう呟いた俺は、自分の指にしっかりと嵌まっている銀の指輪に視線を向けた。
自分の事を悪魔と呼び、更に有り得ない技を使う、触覚の生えた男だか女だか分からない謎だらけの人物、ベルー。
そのベルーを吸収した、正体不明の指輪。
「……ベルーは本当に悪魔で、この指輪は悪魔を自由に封印出来るアイテム……ってのが一番しっくりくる説明だよな……」
ベタな漫画みたいだけど、やっぱりそれが一番しっくりとくる。
その通りなら、言う事聞かないと指輪に閉じ込めるぞ、とベルーを脅せば、ベルーは大概の事は聞いてくれるだろう。
ベルーは指輪に閉じ込められるのを本気で嫌がっていたし。
「ってゆーか……ついさっき、何でも話すって言ってたくせに……」
『ちゃんと貴方の望む事は全てお話致しますので、どうか封印だけはお止めになって下さい！』
ただ思った事を軽く呟いた次の瞬間、しっかりとした口調の男の声が聞こえてきた。
「えっ！？　今度は何？」
声がしたのは俺の目の前、ベルーの方からだった。
でも、声は明らかにベルーのものじゃない。
『どうも申し遅れました。私、我が主ベルフェゴール様の御力によ

って発明された“魔導外套”という物でございます。気軽にコートとお呼びになって下さい』
俺が完全に事態を飲み込むよりも先に、ベルーの羽織っているコートがやけに丁寧な挨拶をしてきた。
今度は喋るコートか……。
不思議な出来事にあっという間に慣れてしまった俺は、コートが喋り出した事に対して驚きではなく、疲れが湧き上がってきた。
思わず溜め息を吐くと、大丈夫ですか？　とコートが心配の声を掛けてきた。
持ち主よりもしっかりしたコートだな、と心から思った。
「大丈夫っていうーか……そういえば、さっき言ってたベルフェゴールっていうのは、ベルーのフルネームなの？」
『左様です。我が主は“怠惰の悪魔”と称される程に面倒臭がりな性格ですので、ご自分の名前を省略する事が常なのです』
俺の問いにコートがしっかりと答えた。
俺はすっかり疲れてはいたけど、それよりも今日の一連の出来事について知りたいという欲求の方が強かったので、コートとの会話を続ける事にした。
ああ、異常な事態に本当に慣れちゃったよ、とも思った。

悪魔ベルフェゴール　その４（後書き）

やっとベルーのフルネームを出せました。
次回で色々な事を明らかにしていきますので、これからもご愛読よろくしくお願いします。
ここまで読んで下さって、本当にありがとうございました。

悪魔ベルフェゴール　その５（前書き）

また長くお待たせしてしまいました。
更新が本当に遅い作品ですが、楽しんで読んで戴ければ幸いです。

悪魔ベルフェゴール　その5

『我が主から許可を戴いておりますので、私に答えられる問いであれば何なりとお答え致しますので、遠慮せずにお尋ね下さい』

「え～と……」

うん、確かに俺は質問したい事で頭の中がいっぱいだった。

でも、そうやって改まって言われると、言葉というやつは中々出て来ないのだ。

しかも、相手が自分の意思を持ってスラスラと言葉を喋る、摩訶不思議なコートなら尚更だ。

「……そもそも……この指輪は、何？」

取り敢えず俺は、悪魔と称している謎の男（女かも？）を出したり、吸収したり出来る――そもそもの事の発端とも言える白銀の指輪の事を尋ねてみた。

『その指輪の事……ですか……』

コートは少し言い難そうに言葉を詰まらせた。

「……あ、あの……分からないのなら、別に無理しなくても……」

『……我が主、よろしいでしょうか？』

コートがベルーに話し掛ける。

当のベルーは完全に眠りに耽っており、返答どころか何の反応も無い。

『……左様ですか……それでは、お話致しましょう』

え？　尋ねた意味は？

『……その指輪の名称や詳しい来歴はまだ分かりません、その指輪はフランスのある魔術師が私と共に我が主を封印し、思うが儘に操る為に作られた物なのです』

俺が頭の中で色々突っ込みを入れている間に、コートはしっかりと俺の質問に答えていた。

「ベルーを思うが儘に操る為の指輪？」
『左様でございます。悪魔との契約は非常に難しく、契約をする者は悪魔と渡り合えるだけの秘められた力を持っていなければならず、更に魔術にも精通していなければ悪魔と契約を結ぶ段階にすらいけないのです。それに、契約をするにしても頭の回転が早く、弁も立たなければ契約を結べずに命だけを落とす事にもなります』
今まで漫画やラノベとかの世界の話しだと思っていた魔術の謎を、コートは淡々と語っていく。
俺はすっかりと聴き入っていた。
『故に儀式を過って命を落とす人間や、契約に失敗して早々に最期を迎えた人間が多くいました。そこで、魔術に精通した人間達は悪魔を一方的に支配する方法を探し始めたのです。そして、生み出されたのが……』
「この指輪だったのか……」
俺は自分の指に嵌まっている指輪を見詰めた。
確かに美術とかの知識が無い俺でも、一目見て凄いと分かるような素晴らしい指輪だが、そんな不思議な力を持っているようには見えない。
『言う事を聞かなければ封印する……そう脅すだけで我が主ほどの大悪魔を使役する事が出来るのです』
「それにしても……よく教えてくれたね、そんな大事な事」
頼んだ俺が言う事でも無いのだが、つい口から出てしまった。
『今の所有者である貴方には偽りなく言っても良い、それが我が主の考えでございますから』
「コートが判断したんじゃないの？」
自分で勝手に決めていた様に見えたんだけどな？
『言葉を使う必要はありません。我が主の魔力で動いている私は、我が主の魔力を通してその思考を読み取らせて戴いておりますから、こうして身体に触れている間は我が主の考えは手に取る様に分かるのです』

俺の考えを読んだかの様な答えが返ってきた。
「つまり、以心伝心ってやつ？」
『その通りでございます』
コートはベルーと違って、面倒くさがらないでしっかりと答えてくれるから助かる。
とゆーか、コートが教えてくれた事を総合的に考えると……。
「……ベルーって、悪魔って何でも出来るの？」
『我が主は、神ではなく悪魔でありますから全知全能ではありません。しかし、悪魔の持つ力、即ち魔力は使いようによっては人間の大抵の望みを叶える事が出来ます』
「……だよね。そうじゃなかったら、そんな命懸けの契約をしたがる人はいないだろうし……」
つまり、この指輪は……アラジンの魔法のランプの様な物って事か。
出て来たのは魔神じゃなくて悪魔だけど。
『特に我が主の魔力は数多くいる悪魔の中でもトップクラスですから、他の悪魔に出来ない事すらも出来るでしょう』
「え？　ベルーってそんなに凄いの？」
この面倒くさがりな悪魔が？
『当然です！　貴方は我が主がどれ程の大悪魔なのかご存知ないのですか？』
そりゃあ、悪魔の会ったのは今回が初めてだし、そもそもオカルト的なものには余り興味が無かった。
『我が主、ベルフェゴール様は悪魔の中でも“七つの大罪”と呼ばれる原罪を司る悪魔の一つに数えられる実力者で、あの魔王サタン様や冥王ルシフェル様とも肩を並べる程の大悪魔なのです！　かつてはフランス中の悪魔を統一するフランス大使を務め、人間の恋愛、結婚の真実を見極めた事や私の様な優れた発明を生み出した事から、悪魔一の賢者、魔界一の発明家とも呼ばれていたのです』
「魔王？　悪魔一？」

それってやばい位に凄過ぎるんじゃないか？
マジで俺は、魔法のランプを手に入れたのかも？
『質問は以上でございますか？』
呆然としていると、コートが俺に尋ねてきた。
「え？　あ、その……そうだ！　さっきのドロドロした奴って何なの？　ベルーは妖怪って言ってたけど？」
慌ててもう一つの疑問を俺は口にした。
『先程、我が主が地獄に落としたものの事でしたら、あれは間違いなく悪魔ではなく妖怪です』
「ベルーにも聞いたんだけど、悪魔と妖怪って違うの？」
そういう事に関する知識が皆無な俺には、その二つの違いが全く分からない。
どっちも怪物だという認識だけだ。
『そうですね……妖怪という言葉は人外、人に非ざるモノの事でもあり、また人知の及ばないモノの事でもありますから、人間の貴方にとっては悪魔も妖怪も広い意味では同じモノという事になるでしょう。しかし、我が主を含める悪魔と先程の現れた類の妖怪は、そもそもルーツがまるで違うモノなのです』
「ルーツ？」
思っていたよりも、難しい説明になるそうだなぁ。
『先ず、悪魔はキリスト教における唯一絶対の神、ヤハウェの敵対者として地獄より生まれ出た種族ですが、妖怪はキリスト教とは一切関係の無く、人間界から自然に生まれてきた種族です』
「えーと……つまり、悪魔はキリスト教と関係あるけど、妖怪は関係無いって事？」
一応、確認してみた。
『一番分かりやすい違いはそうであります』
どうやら合っていたようだ。
そして、すぐに俺は次の質問を口にした。
「それで、あの妖怪がいきなり出て来たのはどうして？　ベルーが

出て来た事と関係あるの？」
『あの妖怪が此処に姿を現したのは、我が主の強大な魔力を感じ取って、それに惹き付けられたからでしょう』
「惹き付けられた？　ベルーの魔力って奴に興味を持って、わざわざ此処までやって来たって事？」
完全に漫画の理論だな、と俺は改めて思った。
フィクションの世界の理論が、まさか現実でも通用する事だったなんて思うと、軽い頭痛すら覚えそうだ。
『自分に永い間掛かっていた封印を一瞬で解く程の力だったのです。妖怪が我が主の居る此処へやって来るのは当然かと』
「封印？」
何か聞いちゃいけない事を聞いたような胸騒ぎが微かにした。
「封印って、どういう事？」
そんな胸中の報せを無視して、俺はコートの言った事の意味を詳しく聞く事にした。
これが、俺とベルーの物語が本格的に始まる事となるきっかけになるとも知らずに。

悪魔ベルフェゴール　その５（後書き）

ここまで読んで下さって、本当にありがとうございます。
取り敢えず、最初の章はこれで完結ですので、次話からは妖怪との戦いの話になる予定です。

首斬り門左衛門　その１（前書き）

どうも、しばらくお待たせしてしまいました。
取り敢えず、序章をどうぞ。

首斬り門左衛門　その１

それは、街灯だけが外を照らしている真っ暗な夜に起こった出来事だった。

遅くまで酒を飲み続けた一人の中年が、家族や近所への迷惑も考えずに家路を歩いていた。

すると、中年の後ろから自分以外の足音が聞こえてきた。

それも、ただの足音では無く、ガチャガチャと金属同士がぶつかって出せるような重々しい音を立てながらだった。

中年はそれを不思議に思い、半分だけ酔いから醒めた様子で後ろを振り返った。

振り返った中年から少し離れた場所に、それはいた。

僅かな明かりによって、何とか全体を視認する事が出来るその姿。

血と泥で汚れた鎧を着こんだ武者の化け物だった。

何故、中年がそれを化け物だと思ったのかは当然の事だった。

中年は汚れている鎧の姿よりも、右手に掴んでいる刀よりも更に非現実な証拠を見たからだ。

その武者に、頭が存在しなかったからだ。

首から上が全く存在しないのに、武者は動いていた。

武者の化け物、暗い空間。

言葉だけではありきたり過ぎて、大した恐怖を抱かせられないが、中年は現実に訪れたその事態に心から恐怖した。

酔いが醒め、鳥肌が一斉に立ち、心臓への苦しさと嘔吐感に似た恐怖感が中年の身体を大きく震わせた。

中年のその後は、あっけなく終わった。

その場から逃げだすよりも、何か声を出すよりも、化け物の存在を現実だと認めるよりも、恐ろしさで締まる肺に空気を送るよりも先に、終わってしまっていた。

中年の身体はそれすらも分からないまま、離れてしまった自分の頭部の方へと無情に倒れた。
頭の無くなった首から、大量の血が次々と流れていく。
武者の化け物は、頭と共に存在しないはずの目でそれを確かめると、血の付いた刀を振り回しながらその場を去って行った。
まるで出来の悪い恐怖映画のようなこの怪事を目撃したのは、塀の上からずっと動かないでいた黒猫一匹だけだった。

首斬り門左衛門　その１（後書き）

次回を楽しみにして戴けたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2138i/

スロウス・リング

2011年11月17日03時27分発行